

# 仙台

# 文学館

# ニュース

第四十八号

エッセイ

## あかまつの道を抜けて

第10回 —— 「木漏れ日」

佐伯一麦

カンヌ映画祭の主演男優賞を受賞した役所広司が演じる『PERFECT DAYS』を、新年早々に遅ればせながら観た。

映画の中で、主人公のトイレ清掃員の平山が、古本屋で買い求めて読んでいた幸田文の『木』（新潮文庫）が出てきて、目を瞠らされた。同時に、それではなか、と思わされた。

中国と韓国で『木』が翻訳出版されることになり、文庫本の解説の拙文も収録したいという依頼が、昨年の夏頃に版元を通して届き、許諾の返事をした。その韓国版の見本が、瀟洒で美しい装幀の本となつて年末に届いていた。今頃なぜ翻訳出版か？という疑問が湧いていたが、世界中で上映されたヴィム・ヴェンダース監督作品の『PERFECT DAYS』がきっかけとなつたらしい、と察せられたのである。

解説を執筆したのは一九九五年だから、ちょうど三十年前になる。この機会に『木』を再読してみても、真っ先に感じたことは当時と同様で、いい文章を読んだという満足感と、そして作者が亡くなって二年後に遺著として出されたこの本は、まさしく伐られた木が

材となつて新たに活かされるような精神性をたたえているということだった。それが今でも新しい読者を生み続けている理由だろう、と深く納得させられた。二月初め、幸田文が『木』に記したことばを思いながら、「あかまつの道」を歩いた。

落葉している樹木も多く、自ずと樹皮に目が行く。杉はたて縞のきものを着ている、松は亀甲くずしの厚いきもの、ひめしやは無地のきもの、いちよの着物はしぼ立っている、すずかけの着物は、織物ではなく、染物の美しさ。「木のきもの」の章に書かれた、七十年間も和服を着つつなれにし、の人間ではの見方に、なるほど、たしかに、と感心させられ興がりながら、幹の色、木の肌を見て回る。

柔らかな冬の光が木漏れ日となつて射している一画に出た。映画『PERFECT DAYS』でも、しばしば出てくる木漏れ日のシーンが印象的だった。(木漏れ日)ということばは(侘び寂び)同様に、英語の直訳語がない日本語独自の表現だという。

(ささきかずみ 作家・仙台文学館館長)

※「あかまつの道」は、台原森林公園と仙台文学館をつなぐ散策路です。

### CONTENTS

- エッセイ  
「あかまつの道を抜けて」 佐伯一麦 ……1
- シリーズ  
「私の一冊」 沼田真佑 ……2
- 特集  
特別展「文豪、仙台ニ立ち寄り。」 関連イベント  
対談「岩野泡鳴を語る」抄録 ……4
- 予告  
2025年度 春の特別展 ……7
- 文学館日誌 ……8



写真：佐々木隆二



版画：明才

## 沼田 真佑

フランツ・カフカ

### 『アメリカ』

挙げるとしたら、H・P・ラヴクラフトがそうだろうか。この人も、パルプ雑誌を中心に数多くの小説を発表したものの、生前刊行できたのはわずかに一冊を数えるのみだった。

フランツ・カフ

若くして世を去った書き手が、没後に評価されるということがある。時代に先んじていた書き手の宿命のようなもので、その意味では喜ばしいことなのかもしれないとは思っても、評伝など読んでその生前の窮乏を知ると、何とかならなかつたのかとため息のひとつもつきたくなる。

そうした人たちのなかには、没後半世紀以上が経過してなお、文芸の世界はもとより、映画や音楽、マンガやゲームといったさまざまなジャンルの表現者を魅了してやまない作品を残した書き手もいる。日本人でこれに該当しそうなのは、たとえば宮沢賢治だろうか。海外にも、もちろんそういう人がいて、仮に一人

恐ろしいのかは説明できないものの、とにかく怖い、といった印象が残るので、読者に寄り添ってくれるなんていうこととは無縁の、むしろ共

カという人も、その代表的な一人だと思う。高校生ぐらいで『変身』と出会い、そこから『審判』『城』といった長篇小説や短篇の諸作に読みふけり、気づけば手紙や日記にまで手を出して、といったお決まりのコースをわたしたどつた。その出会いから早三十年、何度読み返しても味わい尽くした感じがしない、あの底知れない世界からいまも抜け出せないでいる。

振り返ってみて、これまでで一番多くの本を読んだ時期、とは言いきれないまでも、強烈な読書体験に最もめぐまれた時期だったとは言えそう、十代なかばから二十代の初めにかけて、わたしの周囲にはしかし、本好きが少なかった。いや、彼らも

感を拒む世界だと思っていた。それがこの『アメリカ』だけは例外だった。何か人肌にも触れたみたいになぬくもりが感じられたのだ。

本を読んではいた。ただそれらの本というのが、当時のわたしの視野が狭い（きょうやく）目に本とは映らなかつたのだ。早い話が、ブンガクではないと感じていたわけで、その青臭き上から視線にはわれながら手を焼いてもいたので、ブンガクにぞつこんだつたのを周囲には隠して、本なんかそんなに読まないみたいなふりをしていた。何と浅はかな男だったことだろう。

それでも、ふとしたはずみで化けの皮というのはがれてしまうものらしく、相手が何かブンガク的なことを口にする、頼まれもしないのに、好きな小説について語りだしたり、お勧めの本を貸したりしていた。しばらくして感想を尋ねてみると、たいていはページをめくられることなく放置されていたようだったけれど、カフカはちがつた。ほかのも貸してくれとせつつかれることが多かつた。

そんな読書三昧でいられたモラトリアムにも終わりはあつて、就職活動に奔走しなければならぬ時期が来る。当時は圧倒的な買い手市場で、百社エントリーしたとして、最終面接に漕ぎつけられるのは五指にも満たないほどだった。わたしはさほど

物語のおおよその展開は、カール・ロスマンという少年が生まれ育つたヨーロッパを離れてアメリカを彷徨（さまよ）するというもので、紆余曲折をかきねた末に正式な職を得るまでが描かれている。これが何と言おうか、その頃の自分の心情にぴたりと来るものがあった。主人公が行く先々で出会う奇つ怪な人物、理不尽な事件の

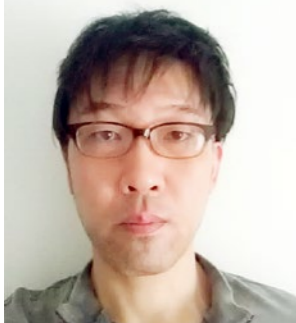
いちいちがリアルに感じられ、作者がめずらしく主人公に肩入れしている気配もあつて、これを読んでいると就活の憂さが晴れていく感じがしたものだ。本書を読んで数か月後、大学を卒

フランツ・カフカ  
中井正文訳  
『アメリカ』  
(初版1972年 角川文庫)

熱心でもなく、徒歩で行って帰れるような会社ばかり訪問しては、追って不採用通知を受け取るというのを繰り返していたが、そんなばつとしない季節に読んだのがカフカの『アメリカ』だった。

その時点で、わたしがまだ『アメリカ』を読んでいたのは、楽しみにとっておいたからではなかつた。生前カフカ自身がこの未完に終わった長篇小説のタイトルを『失踪者』としていたにもかかわらず、没後に『アメリカ』と題して刊行されたというのが不満で、何となく読む気になれずにいたのだ。それがあるとき、合同就職セミナーの会場からの帰途でもあつたのだろうか、古本屋に立ち寄って、文庫の棚に角川文庫版『アメリカ』を見つけたのだった。カフカの作品の読後というのは、よくわからないなりに本物に出会った感じを受けたり、何がどう

業したわたしは、最終章でロスマン少年が雇用されることになる、何をやっているのだからさっぱりわからない「オクラホマの野外劇場」ほどではないにしても、なかなかブラツクな会社に就職した。その後約十年、その構成員として過ごした歳月のうちに、『失踪者』と標題を改めて刊行されていた訳書も読んだ。こちらはこちらで面白く、小説の出来としては上かもしれないとは思っても、「私の一冊」となると『アメリカ』のほうを探りたくなるのは義理を通したい思いもあつたことなのだろう。



沼田 真佑  
ぬまた しんすけ

小説家。1978年北海道生まれ。西南学院大学卒業。2017年、「影裏」で第122回文学界新人賞、第157回芥川賞を受賞。その他の書著に『幻日／木山の話』。2025年1月から「河北新報」でエッセイを連載中。仙台市在住。

# 特別展「文豪、仙台三立子寄ル。」関連イベント 対談「岩野泡鳴を語る」(抄録)

二〇二四年秋、当館で開催した特別展「文豪、仙台三立子寄ル。」の関連イベントとして、明治から大正にかけて活躍した仙台ゆかりの文学者、岩野泡鳴に関する対談を行いました。文芸評論家・池上冬樹さんと当館館長・作家の佐伯一麦が、泡鳴の魅力について語り合った一部をお届けします。

(写真：佐々木隆二)

## ◆破天荒な魅力

**佐伯一麦** (以下、佐伯) 今日秋晴れですね。岩野泡鳴が亡くなった後、文学仲間たちが書いた追悼の言葉を見ると、泡鳴という人は、何もかもあけつびろげで包み隠さず、雲ひとつない天気のような人だったそうです。それが毀誉褒貶を生んだりしたのだけでも、今日は泡鳴にふさわしい日なのではないかと思いま

す。初めに断っておくと、岩野泡鳴は語りにくい。ただ、魅力がある。とてつもなく破天荒な、普通のサイズに収まらない人。どのへんまで話せるか、今日は楽しみにして参りました。

**池上冬樹** (以下、池上) 泡鳴の五部作(※1)はなかなか手に入りにくい。さつき検索したら、泡鳴の代表作はインターネットの「青空文庫」に入っている。ぜひ「青空文庫」で

お読みください。読み返すと本当に面白い。こんなに面白い作家だったかと改めて感激するし、あきれれるし(笑)。経歴としても、先生として仙台に赴任したはずが、試験を受けて学生になったなんて面白いですよ。結局、仙台には三年くらいしかいなかったんですね。

**佐伯** そうですね。ただ、彼の『神秘的半獣主義』(※2)が胚胎したのが仙台時代だったということで、仙台は第二の故郷とも思っていたみたいです。

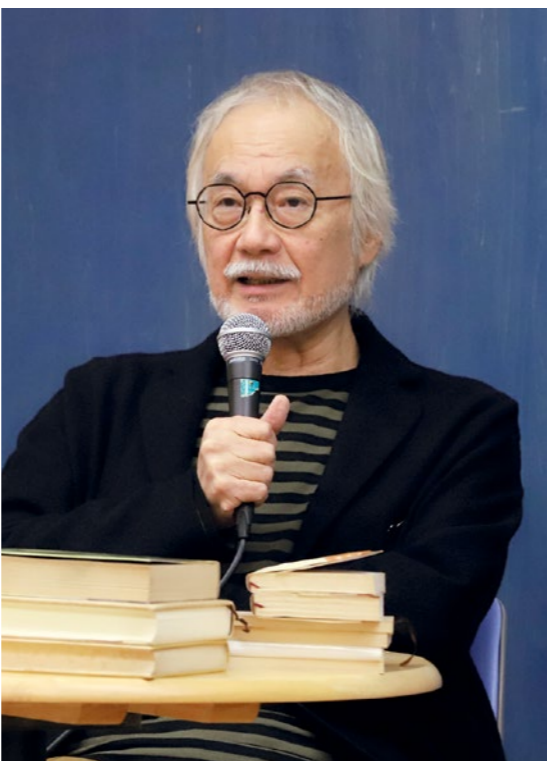
**池上** 私は大学で日本文学科だったので明治文学も一通り読んだけれど、当時、岩野泡鳴を読んでも何も感じませんでした。それが今年(二〇二四年)の二月に企画展「仙台文学館の語り部たち」のトークにお招きいただいて、久しぶりに泡鳴の『毒薬を飲む女』を読んで開眼して、五部作をざっと読んだら、こんな作家はまずいないと思いました。

**佐伯** 読者も「何だこんな話は」と思いながらも、何となくやめられないう。痛いところをつかれたりして。登場人物たちが「もうお前なんか死んじまえ」とやるんだけど、喧嘩の渦中から離れると、「もうちょっと生かしておいてもいいか」と縋りが戻る方向に振られたりとか、そのへんの機微がよく書かれています。

## ◆泡鳴の「耳の良さ」

**池上** 佐伯さんは、岩野泡鳴をいつ頃読んだんですか？

**佐伯** 僕の捉え方だと、ピカレスク、悪漢小説ですよ。岩野泡鳴がもう一回読まれるとしたら、日本においてピカレスクを最初に書いたような存在としてはないかなと思う。破天荒な無鉄砲ぶりという魅力がある。なぜピカレスクであったり、



佐伯一麦 (さえき かずみ)  
1959年仙台市生まれ。作家・仙台文学館館長。著書に『鉄塔家族』『ノルゲ』『還れぬ家』『渡良瀬』『山海記』『アスベスト』『川端康成の話をしよじやないか』(小川洋子氏との共著)など。近著に『ミチノオク』。



池上冬樹 (いけがみ ふゆき)  
1955年山形市生まれ。文芸評論家。長年、各文学賞の予選委員や「山形小説家・ライター講座」「せんだい文学塾」の世話役を務めている。2014年より宮城学院女子大学非常勤講師。2019年から23年まで東北芸術工科大学文芸学科教授。

**佐伯** 僕は、高校時代から読んでいました。

**池上** 高校時代に読んでどうでした？

**佐伯** 僕は高校時代から言文一致以降の日本文学に意識的に目を通そうとして、それで岩野泡鳴も読んだのだけれど、よくわからなかったです。河上徹太郎(※3)が「明治文学史を通じて偉大な小説は沢山あった。然し偉大な小説家は岩野泡鳴ただ一人である」と評価し、泡鳴によるアーサー・シモンズ(※4)の翻訳に魅了されたと言っていて、また井伏鱒二(※5)が文学者として非常に尊敬していたのが岩野泡鳴で、興味があつて読んでみましたが、正直ピンと来なかった。ただその後、僕が東京に

いる間に新人賞をもらって小説家としてデビューして、アスベストで体を壊して仙台に戻り、こっちで創作に専念する形になった頃に、離婚して家族と離れた。そういうシチュエーションで、三十四、五歳で岩野泡鳴の作品と再会して、主人公に共感はしないけれども、ここまで徹底的に生きていく、女性も対等に張り合っ、男女がフアイトし合いながら生きていくという姿勢には納得した。それで影響を受けて『まぼろしの夏』という小説を書き、その中に泡鳴の名前もちらっと出しています。

**池上** 私は日本文学から海外ミステリーに行っているいろいろな読んできますが、泡鳴を読み返して思った

のは、会話がリズムカルで面白いということ。こんなに勢いのある調子のいい会話を書けるというのは、耳がいいんですね。もうひとつは、悲惨な話ではあるけれども、ユーモアがある。泡鳴は意図的にユーモアを出そうとは思っていなかったでしょうが、結果的に笑いに変わって、みんなこんなふうにして生きていくというのが逆にわかる。

**佐伯** 泡鳴の耳の良さは僕も感じます。泡鳴は、初期に戯曲も書いています。泡鳴は、セリフのうまさはそのくらいにも関係があるのではないのでしょうか。

## ◆さまざまな読まれかたの可能性

**池上** アメリカの作家、チャールズ・ブコウスキー(※6)の『町でいちばんの美女』という作品が一九九〇年代に翻訳されて、日本でも流行しました。ブコウスキーは露悪的で破天荒な私生活を描いている作家です。でも、いやらしさがない。ブコウスキーが好きな人が岩野泡鳴を読んだら絶対にはまると思う。百年前に日本にブコウスキーがいたと言ってもいい。そういう感じで岩野泡鳴を読んでほしい。



## 岩野泡鳴

作家・詩人。1873年、現在の兵庫県洲本市生まれ。本名・美衛。明治学院等を卒業後、1891年1月から1893年12月まで仙台神学校(東北学院)に在籍。その後上京し作家活動を開始した。芸妓と自身の関係を基にした小説『耽溺』により文壇から評価され、その後も『発展』『毒薬を飲む女』ほか「泡鳴五部作」と呼ばれる長編小説を書いた。1920年、47歳で死去。

ブコウスキー的な泡鳴の語りに惹かれるかという点、そもそも十八世紀までの小説は、近代小説の元祖である『ドン・キホーテ』のように荒唐無稽であつたりしたけれども、十九世紀になると小説は文学のあらゆるジャンルの王様のように偉くなつてしまつて、様式や技術も非常に洗練されていった。ピカレスクロマンは、

教養小説、いわゆるビルドゥングスロマンになつていつて、登場人物は成長しなければいけない、破天荒だった男が改心していい人になりました、ということを強いられるようになった。岩野泡鳴の作品は、十九世紀的小説の深刻化したものを元に戻して笑い飛ばす、もう一回ピカレスクに揺り戻すという力はあると思ひます。

◆泡鳴が長生きしていたら……

池上 泡鳴の年譜を見ると、一八九六年に最初の妻と入籍して長女が生まれ、その後通訳と英語の教師になり、一九〇六年に処女小説『芸者小竹』を発表して、その二年後に父親が亡くなる。一九〇九年に出世作『耽溺』を出すけれど、経済的に行き詰まり、樺太で蟹の缶詰事業を営む、とある。皆さん、「何この人」と思うでしょうけど（笑）、そういう時代なんです。缶詰事業を目標で樺太に渡つた話というのが『放浪』ですね。あと『断橋』。事業に失敗して戻ってくるまでの話が五部作です。五部作全部をいきなり読むのは大変でしょうから、出世作の『耽溺』、もしくは『毒薬を飲む

女』が入門編としていいかもしれない。この二作品を読めば泡鳴にはまるので、挑戦してみてください。価値観が変わります。

佐伯 泡鳴は一九二〇年に四十七歳で亡くなっています。腸チフスになつて病床にいたときに、少し良くなつたというので林檎をまるかじりする。それが大腸に穴を開けちゃうんです。その穴を手術で塞がないと命はない、ということになつて手術をする。そのとき、こんな経験を

した作家はそうはいないはずだから、手術が終わつたら自分はずますますいいものを書くぞと起き上がった、と言つたという。でも亡くなつてしまった。作家は長編小説になるとだいたい五十代でいちばんいいものが書ける。そういう意味では、もうちょっと生きていたら、一元描写論（※7）を活かした長編小説を書いたかもしれない。そうしたら泡鳴の文学的な名声は決定的になつていたんじゃないかと思ひます。

（2024年11月10日開催）

- ※1 五部作：『発展』『毒薬を飲む女』『放浪』『断橋』『憑き物』の連続長編小説の総称。女性問題を起し放浪生活を送る主人公・由村義雄は泡鳴自身がモデル。
- ※2 「神秘的半獣主義」…泡鳴が一九〇六年に発表した評論。人間は利他的存在であり、その写実が文芸であるということを書き、表象利那の哲学を説いている。
- ※3 河上徹太郎：一九〇二～一九八〇文芸音楽評論家。著作に『私の詩と真実』『日本のアウトサイダー』など。
- ※4 アーサー・シモンズ：二八六五～一九四五イギリスの詩人・文芸評論家。代表作『象徴主義の文学運動』は泡鳴が『表象派の文学運動』の題で翻訳した。
- ※5 井伏鱒二：一八九八～一九九三作家。著作に『山椒魚』『ジョン万次郎漂流記』『黒い雨』など。
- ※6 チャールズ・ブコウスキー：一九二〇～一九九四アメリカの作家・詩人。著作に『パルプ』『郵便局』など。
- ※7 一元描写論…泡鳴が提唱した小説の描写の方法論。小説中の事件および人物の心理は、すべて作中の一人物の視点を通して見たものとして描写すべきであるとするもの。（『日本国語大辞典』第二版）



予告

二〇二五年度 春の特別展

「詩人・山村暮鳥展―雲もまた自分のようだ―」

現在の群馬県高崎市に生まれた山村暮鳥は、日本聖公会の伝道師として働く傍ら詩を創作。病と貧困に苦しみながらも、童話や童謡、小説など多様な作品を残しました。

暮鳥は一九〇九年に日本聖公会仙台基督教教会に着任。十か月ほどの滞在の間に二冊のパンフレット詩集を刊行したほか、地元で文学青年たちと交流し、離仙後も彼らの文芸活動に関わるなど、仙台との縁を持ち続けました。

今回の展示を通して、暮鳥の生涯と作品世界に目を向けていただければ幸いです。

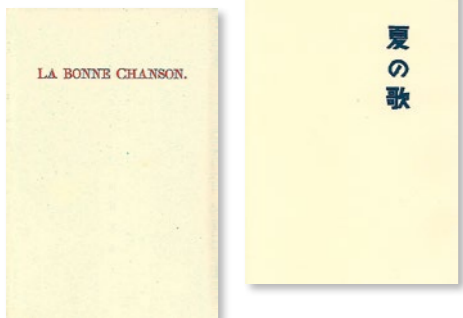


山村 暮鳥

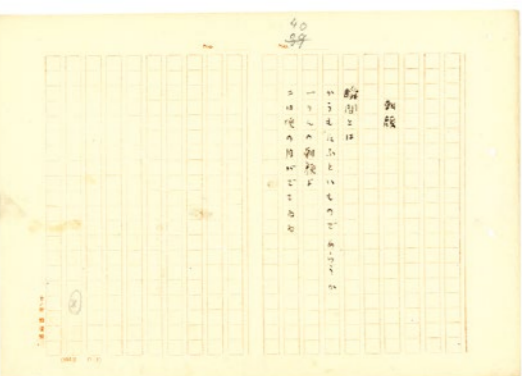
（群馬県立土屋文明記念文学館提供）

1884年～1924年

群馬県生まれ。本名 木暮八十九。小学校の代用教員を経て、日本聖公会の伝道師となり、秋田、仙台、水戸、平（現・福島県いわき市）などに赴任。その傍ら、詩や童話・童謡の創作を手がけた。病と貧困に苦しみ、40歳で亡くなる。写真の犬は愛犬・サンデー。



仙台で刊行したパンフレット詩集『LA BONNE CHANSON.』『夏の歌』（いずれも複製）



自筆詩稿「朝顔」（群馬県立土屋文明記念文学館蔵）

特別展「詩人・山村暮鳥展―雲もまた自分のようだ―」

会 期＝2025年4月26日（土）～6月29日（日）  
休館日：月曜日（5月5日は開館）、4月30日（水）、5月7日（水）、5月22日（木）、6月26日（木）  
開館時間＝9:00～17:00（展示室への入場は16:30まで）  
会 場＝仙台文学館 企画展示室  
観 覧 料＝一般810円、高校生460円、小・中学生230円（各種割引あり）

〈訂正とお詫び〉

『仙台文学館ニュース』四十五号（二〇二三年八月発行）に掲載した「佐伯一麦 北根ダイアログ2023」佐藤厚志と語る（抄録）の内容の一部に誤りがありました。

五ページ「T.S.エリオットの『荒地』という詩があつて、東北学院大の植松靖夫先生（佐藤さんの恩師）が、多分この『荒地の家族』の『荒地』はここから来てるんじゃないかとおっしゃっていた。」佐伯館長のこの発言の部分について、植松先生から事実と違うというご指摘がありました。

植松先生は、二〇二三年四月十五日（土）に東北学院大学で行われた佐藤厚志氏の芥川賞受賞記念トークイベントでは、下記のようなお話をされています。

「佐藤厚志が意図したかどうかは関係なく、『荒地』ということばを作品の題名に使うことで、『荒地の家族』はT.S.エリオットの詩の世界と重なり、自動的に英文学さらにヨーロッパ文学・世界文学の世界の中に組み込まれて、『荒地』はT.S.エリオットの詩の世界と重なり、さらにその背後にあるアーサー王伝説・聖杯伝説の世界ともつながり、単に宮城県の一地域を舞台にする物語ではなく、ヨーロッパ文学のDNAを受け継ぐ『死と再生』さらに『生と再生』の物語として作品に広い視野と厚み加わる」

当館での「佐伯一麦 北根ダイアログ2023」佐藤厚志と語る」の際、佐伯館長のタイトルについての発言は、この四月十五日のトークイベントを聞いたうえで発言でした。ただ、対談の抄録を当館がまとめる際に、短絡的なものとなり、結果的に植松先生の発言の意図とも、佐伯館長の意図とも違う、誤った内容となつてしまいました。

植松先生には大変ご迷惑をおかけいたしました。訂正してお詫び申し上げます。

2024年8月～2025年2月



①「荒城の月」「椰子の実」など、ソプラノ・中澤香織さん、フルート・佐々木舞さん、ピアノ・榎本未来さんの息の合った演奏に、聴衆のみなさんから大きな拍手が贈られました。



②宮沢賢治と音楽 研究家のささきたかおさんのお話と、SPレコード、キーボード・井上英司さん、クラリネット・松村和昭さんによる生演奏とで、宮沢賢治が親しんだ音楽を味わいました。

③当館の開館25周年、井上ひさし生誕90年の記念公演でもありました。主人公・小林多喜二の生涯を、在仙の俳優・音楽家が熟演しました。



④大勢の参加者が、大沼英樹さんの写真を見ながら、渡辺祥子さんによるエッセイの朗読に耳を傾けました。

1月 25日 写真展「Life is Beautiful 大沼英樹と桜」オープン(3月23日まで)。初日に合わせ、朗読家・渡辺祥子さんと、写真家・大沼英樹さんによるギャラリートーク&リーディングを開催。(写真④)

28日 「こどもの本のへや」に、12月に逝去した絵本作家・いわむらかずおさんの追悼コーナーを設置。当館では2014年に「いわむらかずお原画展」を開催した。

2月 1日 写真展関連イベントギャラリートーク「写真集『幸福の種 時き桜』を作るまで」を開催。出演は編集者・川元茂さんと大沼英樹さん。

15日 第17回「仙台朗読祭」を開催。20人の参加者が思い思いの朗読を披露した。ゲストの朗読家・渡辺祥子さんと詩人・和合亮一さんによる朗読も。

21日 友の会25周年記念「わたしと桜」の作文展示(写真展「Life is Beautiful 大沼英樹と桜」との連携企画)を2階ギャラリースペースに設置。

23日 写真展関連イベント 写真でおしゃべり「ひらり、ふわり～政宗さまの桜めぐり」を開催。出演は児童文学作家・佐々木ひとみさんと大沼英樹さん。

8月 2日 こども文学館えほんのひろば「長野ヒデ子 絵本と紙芝居」関連イベント ワークショップ「ぶらぶら人形をつくろう」を開催。

3日 同関連イベント 長野ヒデ子&やべみつりの絵本と紙芝居の会を開催。

9月 8日 こども文学館えほんのひろば「長野ヒデ子 絵本と紙芝居」会期終了。

10日 外看板と館内のバナーを特別展「文豪、仙台ニ立チ寄ル。」に掛け替え。

10月 5日 特別展「文豪、仙台ニ立チ寄ル。」オープン(12月15日まで)。

14日 晩翠忌記念イベント「『荒城の月』を歌い継ぐ」を開催。(写真①)

19日 晩翠忌記念イベント・特別展「文豪、仙台ニ立チ寄ル。」関連企画「SPレコードで聴く『宮沢賢治と音楽』」を開催。(写真②)

20日 第65回「晩翠わかば賞・晩翠あおば賞」贈呈式を開催。同賞は東北地方および仙台市国内姉妹都市の小・中学生による詩作品に贈られる賞。

11月 4日 年明けの新春ロビー展「100万人の年賀状展」関連イベントとして、「絵手紙教室」を開催。

10日 特別展「文豪、仙台ニ立チ寄ル。」関連イベント対談「岩野泡鳴を語る」を開催。(本紙4～6ページ参照)

19日 13日に逝去した詩人・谷川俊太郎さんの追悼コーナーを2階ギャラリースペースに設置。

12月 1日 特別展「文豪、仙台ニ立チ寄ル。」関連イベント講演「太宰治と仙台」を開催。講師はフリーライターの須永誠氏。

15日 ライブ文学館Vol.21「組曲 虐殺」(作:井上ひさし)を上演。会場は日立システムズホール仙台。(写真③)

17日 外看板と館内のバナーを写真展「Life is Beautiful 大沼英樹と桜」に掛け替え。

20日 1階エントランスに伝統門松を設置。

1月 5日 歌人・評論家の佐藤通雅さんの「第74回河北文化賞」受賞を記念して、2階ギャラリースペースに特集コーナーを設置。

12日 今回で23回目となる新春ロビー展「100万人の年賀状展」オープン(2月11日まで)。



交通のご案内

■バス利用の場合

(宮城交通バス)

○仙台駅西口バスプール2～4、6番乗り場  
仙台北・泉地区方面行  
(北山トンネル経由を除く)

(市営バス)

○仙台駅西口バスプール6番乗り場  
八乙女駅行

※いずれも「北根二丁目・文学館前」下車

■地下鉄利用の場合

地下鉄南北線「台原駅」下車、  
南1番出口より徒歩約25分  
(台原森林公園内あかまつの道経由)  
※山道です。雨天時は道が滑りやすくなりますので、ご注意ください。

■駐車場40台(無料)

台数に限りがございます。なるべく公共交通機関をご利用ください。



カフェ ひさしの杜

お食事、デザート、各種飲み物などをご用意しています。  
お得なランチメニューもあります♪

[営業時間]  
10:00～16:00(ラストオーダー15:50)  
※ランチは10:00～14:00  
TEL 022-219-1341

